



外からの視線や、日当たりに配慮して 落ち着いてくつろげる団欒の場を

心癒される庭、美しく機能的なエクステリアをつくるにはどうしたらいいのでしょうか。今号から今回のテーマは「アウトドアリビング」。家族が集まるくつろぎの場を、もっと居心地よくするため

3回にわたり、ガーデンデザイナー・井田洋介さんに、そのヒントを教わります。に実例に即してアドバイスをさせていただきました。



いだ・ようすけ
井田 洋介 ガーデンデザイナー、園芸研究家

1944年11月、大阪生まれ。東京都立園芸高校卒業。造園と園芸の店「アウトテリア民園」主宰。ガーデンデザイナー、グリーンコーディネーターの草分け的存在として、ガーデンデザインやコンテナガーデン指導のほか、NHK「趣味の園芸」「私のガーデニング」や雑誌、講演など幅広く活躍。著書は「リビングガーデン一庭で素敵に暮らす」(長岡書店)、新・庭のデザイン実例集5(家の光協会)、「小さな庭で楽しむ花」(NHK出版)、「園芸ミニ百科」(ひかりのくに)など多数。

「庭に家族で楽しく過ごす場所がほしい」と、アウトドアリビングを望まれるお客様が増えています。しかし、ただ庭先に板を張ってデッキをつくれればいい、というものではありません。なによりも重要なのは、どう使いたいかということ。お茶を飲むのか、昼寝をするのか、もっと別のことがしたいのか。それによって設置場所や広さも変わってくるでしょう。また、デッキには椅子やテーブルを置く、などと決めつけず、狭いなら家具など無理に置かないで、ラグを敷いたり座布団を使ってもいいのです。設置場所は、日当たりのいいところにつくられることが多いですが、そうすると

夏はカンカン照りで使えないことも。そんな場合は、近くに木を植えるとか、木の下にデッキを設けるといいでしょう。木は落葉樹にすれば、夏は葉が茂って涼しい木陰をつくり、冬は葉が落ちて暖かい日だまりをつくってくれます。安心してくつろげる場所になるように、プライバシーを守る工夫も大切。道からの視線、隣家からの視線を遮るために、間に木を植えたり、トレリスや柵などでさりげなく目隠しをしましょう。ただし、閉鎖的になりすぎて圧迫感を感じることがないように、景色が抜ける部分は残し、戸外のすがすがしさを感じられる場づくりを心がけてください。

Lesson 1

L字のデッキで 細長い庭に奥行きを感じさせる

S様邸

古い庭をリフォーム。リビングルームに沿って設けたデッキを庭の端でL字に突き出し、ベンチを2本置いて、アウトドアの団欒スペースに。家に沿って横に細長い庭ですが、このように端からの視線をつくると、奥行きを感じさせることができ、実際よりも広々と見えます。古い木があると庭が落ち着き、貫禄が生まれるので、木はできるだけ残すようにしましょう。



奥は隣家なので間仕切りフェンスを設置。ただし高さを140cmに抑えたので、木々の借景も楽しみつつ、ベンチに座れば視線も遮れます。床を切って松の木を残したので、木陰ができて夏も涼しく、「ベンチでごろ寝」は最高だとか。



左側が家。リビングを出てデッキ伝いにベンチのところまで行きやすい。ベンチのところから木越しに自分の家を眺めるのも新鮮な景色だと、ご家族から喜ばれています。

Lesson 2

庭木とフェンスの配置で「開放感」と「落ち着き」を演出

K様邸

庭にリビングダイニングから出られるアールのデッキを設置。そのまま丸見えで落ち着かないので、隣家との境には高く、玄関アプローチ側には低く、竹製のフェンスをつけて視線を遮断。そして、フェンスのない部分は、道路との間に常緑樹を植えて、目隠しをかねた緑の背景をつくりました。デッキの中とフチには落葉樹を何本か配置。夏は涼しい日陰になり、冬は葉が落ちるので日向ぼっこが楽しめます。



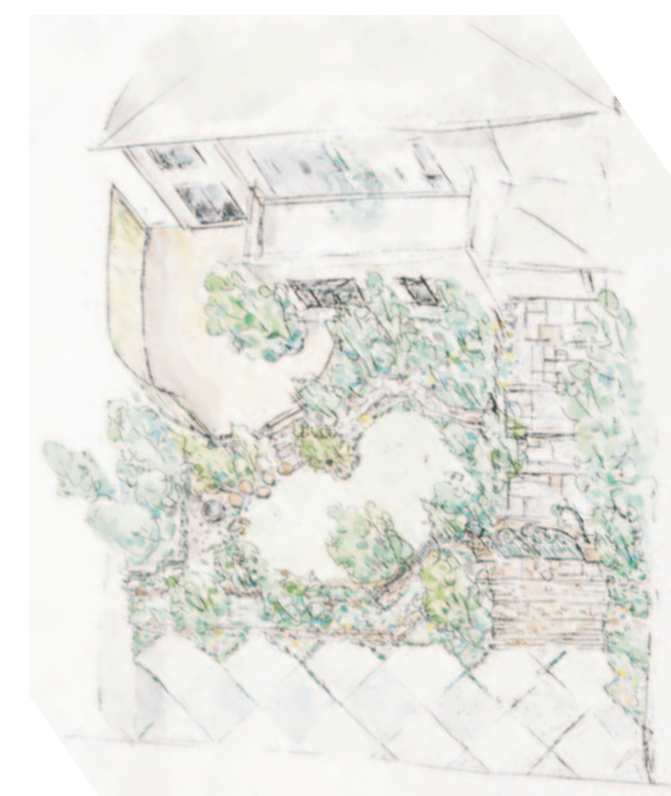
隣家との境(右側)は高く、玄関アプローチ側(左側)は低く仕切って、プライバシーを守ると同時に、視線が抜ける部分もつくって開放感も確保。竹製のフェンスはナチュラルで優しい印象。



椅子に座るだけでなく、このようにラグやゴザなどを敷いてじかに座るのも楽しい。より気楽にくつろげます。



玄関アプローチ側のフェンスは低いので、圧迫感がなく、後ろに植えた木々の緑も生きます。デッキの中の木は株立ちのコナラ。



庭木の配置と、フェンスの位置と高さが絶妙で、あらゆる方向からの視線をたくみに避けながら、デッキ+芝生の心地よい庭をつくっています。